

頭部外傷後遷延性意識障害に対する高気圧酸素療法の適応についての検討

○清水 康子¹、井上 のぞみ¹、八木 良子¹、松村 望東美¹、足立 幸枝¹、吉田 英統²、
萬代 眞哉³、梶谷 伸顕³、本田 千穂³、衣笠 和孜³

¹岡山療護センター 看護部、²南岡山医療センター 神経内科、³岡山療護センター 脳神経外科

【背景】当センターでは頭部外傷後の遷延性意識障害に対して高気圧酸素療法 (HBO) を施行しているが、その治療適応や施行方法は確立されていない。

【方法】当センターへ入院しHBOを施行した遷延性意識障害患者のカルテ記録を後方視的に評価した。重症度は遷延性意識障害度評価表 (NASVAスコア) を用いて、入院時とHBO各クール終了後および入院1年後に評価した。

【結果】対象は70名 (男43名、女27名) で、受傷時平均37.7歳 (6-77歳)、受傷から入院までの期間は平均9.2ヶ月 (2-64ヶ月)、入院時NASVAスコア平均47.6点 (21-60点) であった。HBOは平均2.5クール (1-2クール27名、3クール37名、4-5クール6名) 施行した。NASVAスコアの改善点数 (入院時-1年後) を従属変数とし重回帰分析を行ったところ、筋弛緩薬・向精神薬の使用 ($\beta = -0.353$)、受傷時年齢 ($\beta = -0.367$)、脳室シャントあり ($\beta = -0.325$)、受傷から入院までの期間 ($\beta = -0.239$) が有意に関連していた。筋弛緩薬など使用群 (41名、7.0点改善) と非使用群 (29名、12.8点改善)、および脳室シャントあり群 (28名、6.7点改善) となし群 (42名、11.2点改善) では改善点数に有意な差を認めず、一方入院時NASVAスコア点数およびHBO施行回数は改善点数と有意な相関を示さず、HBO施行回数ごとの5群間で改善点数に有意な差は無かった。また4クール以上施行する効果は不明確であった。

【考察】HBOは受傷時年齢が低く、治療導入まで短時間で、筋弛緩薬・向精神薬を使用せず、脳室シャントのない患者でより有効であることが示唆された。重症例でも治療不適応とはならないが、施行回数についてはさらに検討が必要である。